

言われるが、二番目に

河口堰酸欠で「死の海」

長良川 環境団体がへドロ調査

東海三県の環境団体などでつくる「市民による「豊かな海づくり大会」実行委員会」は二十五日、三重県桑名市の長良川河口堰周辺で「へドロを見る会」を開いた。堰の上下流の川底からは真っ黒で

異臭を放つへドロが採取され、参加者は船上からゲート開放を訴えた。

同実行委は、六月に

直視しよう」と結成。大会の一週間前に独自の海づくり大会を開く予定で、プレイベントとしてへドロを見る会を企画した。

関市の長良川で開かれる「第三十回全国豊かな海づくり大会」に合わせて「河口堰問題を二カ所、上流一カ所

参加者は船に乗り、長良川の河口堰の下流



長良川河口堰の上流で採取したへドロを見る参加者ら＝三重県桑名市で

と、河口堰のない掛斐川。川河口一カ所の計四カ所の川底の泥を採取し、比較した。

長良川の三カ所の泥はいずれも、含有酸素量を示す「酸化還元電位」の数値がマイナスで酸欠状態。真っ黒で粘性の高いへドロがほとんどだった。一方、掛斐川の川底はすべて砂で酸素が豊富。生きたヤマトシジミも確認された。

岐阜大の粕谷志郎教授（環境生態学）によると、堰上流には川から流れてきた有機物が堆積。堰が海水と淡水を分離したため、堰下流ではゲートを越えた比重の軽い淡水と、重い海水が層を形成。底に新しい酸素が行き渡らず「酸素が必要な生物が生きられない死の海」になっているとい

また、堰で潮の干満がなくなったために激減したヨシ原も見学。

岐阜大の山内克典名誉教授（動物生態学）によると、一九九五年の堰運用から八年で、河口のヨシ原の九割が消え、水の浄化作用が失われたという。今本博健康大名誉教授（河川工学）は「当時の河川工学が環境への配慮を欠いていたことは明らか。これらの情報を市民や行政が共有し、ゲート開放の必要性を考えるべきだ」と話している。（山本真嗣）

岐阜のタウン情報を携帯で「中日新聞・中スポ」

動画や街角ライブカメラも見られます

iモード、Yahoo!ケータイ、EZウェブのニュースメニューからアクセス

※バーコード対応の携帯電話で読み取ってください。